

ある夏の思い出

1/10スケールクトゥルフ神話TRPGミニシナリオ 著:D_human

概要

このミニシナリオは簡単にCatsUdonでVRTRPGを体験してもらうためのキットになっています。

1/10スケールクトゥルフ神話TRPGのルールを使用します。[【公式】クトゥルフ神話TRPG](#)が公開している[惑いの森](#)などの1/10スケール・クトゥルフ神話TRPGシナリオ(無料)をご確認ください。

はじめに

プレイヤーは自分の分身として操作するキャラクターを4人のサンプルキャラクターから選びます。

GM一人、プレイヤー一人を想定していますが、同居している設定で二人以上でプレイすることもできます。PrologueとEpilogueを除くと5つのチャプターがあり、それぞれで選択肢が設けられています。場合によっては【××】で判定を行う【正気度チェックを行う】という記載がある場合はそれに従ってください。その処理が終わったら次のチャプターへと進みます。

正気度が0になると巻末の【正気度が0になった場合】の項を参照して、Epilogueの代わりとしてください。

サンプルキャラクター

1 パワータイプ

STR/筋力 8 CON/体力 7 SIZ/体格 8 DEX/敏捷 7 APP/外見 4 INT/知性 5 POW/精神 6 EDU/教育 5

正気度 6 耐久力 8 アイデア 5 幸運 6 知識 5 格闘ダメージ 1D6+2

応急手当 5 オカルト 2 回避 6 格闘 7 聞き耳 4 説得 2 目星 4

2 ブレインタイプ

STR/筋力 5 CON/体力 4 SIZ/体格 6 DEX/敏捷 5 APP/外見 7 INT/知性 8 POW/精神 6 EDU/教育 9

正気度 6 耐久力 5 アイデア 8 幸運 6 知識 9 格闘ダメージ 1D6-1

応急手当 8 オカルト 9 回避 5 格闘 3 聞き耳 5 説得 8 目星 6

3 ラッキータイプ

STR/筋力 6 CON/体力 5 SIZ/体格 7 DEX/敏捷 8 APP/外見 5 INT/知性 6 POW/精神 7 EDU/教育 6

正気度 7 耐久力 6 アイデア 6 幸運 7 知識 6 格闘ダメージ 1D6

応急手当 4 オカルト 2 回避 8 格闘 2 聞き耳 5 説得 5 目星 8

4 バランスタイプ

STR/筋力 7 CON/体力 6 SIZ/体格 6 DEX/敏捷 7 APP/外見 6 INT/知性 6 POW/精神 6 EDU/教育 6
正気度6 耐久力6 アイデア6 幸運6 知識6 格闘ダメージ 1D6
応急手当 5 オカルト 4 回避 5 格闘 5 聞き耳 6 説得 4 目星 5

Prologue

夏になると決まって思い出すことがある。

あれは大学3年の夏休み、今日と同じようにうだるような暑さの日だった。

当時の俺は築50年のオンボロアパートで1人暮らし。ちゃぶ台の前に1人座り、1週間前のことを思い出していた。

Chapter.1

俺にはオオタダイスケという友人がいた。

オオタと出会ったのは大学1年の教養課程、英語の講義でたまたま隣の席になったのがきっかけだった。

別に同じサークルでも住む場所が近かったわけでもない。講義のあとに言葉を交わすだけ。

だが、不思議とウマがあった俺たちは、その後も付き合いが続いた。

オオタは哲学科で気難しいやつだったから俺以外に友達と呼べそうな人間関係はなく、困ったことがあれば俺の元にやってくるのがほとんどだった。

だからあの時もオオタの頼みを聞くことにしたんだ。

オオタはかなり切羽詰まった表情で「絶対に人に見せたりしないでくれ、お前も中を見ようとしなくていい、2週間これを預かってくれるだけでいい」そう言うと、半ば押し付けるように、何かが入ったポストンバッグを渡してきた。

そして1週間が経った。オオタとの約束だ、流石に中を見るのはマズいだろう。だがこれが危険なものだったり、法に触れるものだったらどうする。オオタは悪いやつではないが、少し得体のしれないところがある。流石に犯罪に巻き込まれたりしてないと思いたいが.....

▶ポストンバッグの中身を見る

俺は我慢できずにファスナーを開け、中身を見た。

そこにあったのは真っ黒な球体だった。うっすらと表面が光っており、眺めていると吸い込まれそうになる。価値があるかわからないが、不気味だ。

【正気度チェックを行う】成功/失敗(1/1D3)

▶我慢する。

オオタとの約束を破るわけにはいかない。俺はグッと欲望をこらえた。

Chapter.2

翌日のことだった。俺がトイレにいと、呼び鈴がなった。

よほど急いでいるのか間を置かず続けて3度呼び鈴の音が聞こえる。俺はトイレから「今行きます！」と声をかけた。玄関ドアを開けると姿を見せたのは、オオタだった。

事情が変わったから預けていたものを返してくれという。急な話だったが、オオタ自身がそう言うのだからしょうがない。

ポストンバッグを取りに部屋に戻ろうとしてふと気になった。

▶オオタの格好が気になる【《目星》で判定を行う】

成功→よく見ると最後に会った時と同じ服装だ。オオタは気難しいが変に気を使うやつだったから、人と会う時は違う服を着るようになっていると言っていた。まあ俺は気にしていなかったのだが、何かひっかかる。

失敗→何か違和感を感じたがおかしなところはない、気のせいだと思うことにした。

▶オオタが嘘をついてないか調べる【《心理学》で判定を行う】

成功→オオタは明らかに嘘をついている。だがそれ以上に先ほどからまばたきもせず、汗1つかいていないのが不気味だ。

【正気度チェックを行う】成功/失敗(0/1)

失敗→オオタは嘘をつくようなやつじゃない。俺は疑ってしまったことを恥じた。

Chapter.3

オオタはどうやらポストンバッグを受け取るまで帰るつもりはないらしい。

▶おとなしく渡す。

オオタはボストンバッグを受け取ると表情を一切変えずにありがとうと礼を言うとアパートを後にした。気になった俺は後をつけることにした。

▶中身をすり替えて渡す【《手さばき》で判定を行う】

成功→咄嗟にボストンバッグの中身と手近にあった分厚い参考書をすり替えた。ボストンバッグの中身は黒く不気味に光る球体だった。この球体を初めて見る場合は【正気度チェックを行う】成功/失敗(0/1D3)

オオタはボストンバッグを受け取ると表情を一切変えずにありがとうと礼を言うとアパートを後にした。気になった俺は後をつけることにした。

失敗→オオタの目を盗んで中身を入れ替えるのは困難だ。どうやらおとなしく渡すしか無いらしい。

オオタはボストンバッグを受け取ると表情を一切変えずにありがとうと礼を言うとアパートを後にした。気になった俺は後をつけることにした。

Chapter.4

オオタがやってきたのは古い廃屋だった。

ほこりまみれの室内は暗くあたりの様子はよくわからない。

足元に気を付けながら奥へと進んでいくと見慣れない金属の円筒形の容器が置いてある。

▶中を覗いてみる。

なんと、中には液体と一緒に脳みそが詰められていた。綺麗なピンク色の脳みそは、信じられないことに今もその機能を失ってはいないようだった。

【正気度チェックを行う】成功/失敗(1/1D3)

その場に置いて奥へと進んだ。

▶無視して奥へ進む。

君子危うきに近寄らず。何か気になるが今はオオタの行先の方が重要だ。

奥へ進んだ。

Chapter.5

廊下を抜けた更に奥の部屋にオオタは進んでいく。その足取りは覚束なく、まるで老人かあるいはリハビリ中の入院患者のようだ。部屋の中は今いる場所からは見えない。椅子の軋む音に続き、ファスナーを開ける音がした。

▶ボストンバッグの中身を入れ替えた

バサバサバサ！ 分厚い参考書が地面に散らばる音。

一瞬のあと、部屋の中から聞いたこともない奇声上がる。

俺は慌てて身を隠した。バタバタと何かが外へと駆け出す音が響いた。

部屋に入ると、ボストンバッグと参考書のほかに奇妙なものが床に投げ捨てられていた。

それは肌色のボディースーツのようだった。しかし、紛れもなくそれは俺が知っているオオタの皮で出来ていた。

中身は骨も肉も臓器もなく綺麗にくり抜かれていた。

【正気度チェックを行う】成功/失敗(1/1D6)

俺は慌ててその場を逃げ出した。

▶中身を入れ替えなかった

キイイイイン！ 音叉のような音が建物にこだました。

何が起こったのかわからなかったが俺は恐ろしいものを目にした。

【正気度チェックを行う】成功/失敗(1/1D6)

俺が目にしたのは床に置かれた黒い球体と何もない空間に現れた「裂け目」だった。

そして人間大のグロテスクな怪物がその「裂け目」に入っていくのを目にした。それはかぎづめのついた直立する甲殻類のような体と一対の羽根が備わっていた。渦巻き状の楕円形をした頭部には目鼻はなく無数の触覚が蠢いていた。

床にはそれが脱ぎ捨てた「オオタの皮」が捨ててあった。それは肌色のボディースーツのようだった。しかし、紛れもなくそれは俺が知っているオオタの皮で出来ていた。中身は骨も肉も臓器もなく綺麗にくり抜かれていた。

俺は慌ててその場を逃げ出した。

Epilogue

あれから十数年の月日が経った。その後、オオタの姿を見ることはなく、家族によって捜索願いが出された。俺はあの時のことを誰にも話すことはなかった。出来るなら何もかも夢だと思っていたかったのだ。

.....呼び鈴がなる度に、俺は心臓が掴まれたような感覚に陥る。玄関を開けるとあの時と何一つ変わりのない姿のオオタがその場に立っていたらと思うと、俺は震えあがるのだ。(了)

【正気度が0になった場合】

1D6を振り、記述に従う。

1、意識が遠くなり気が付くとそこは病院のベッドだった。俺は気を失い倒れていたところを発見されたのだと言う。俺が見たものがなんだったのか、最早確認する術はない。一刻も早く何もかも忘れてしまおうと思った(了)

2、俺はオオタと再会した。オオタはとても晴れやかな気分だという。アイツは1週間の旅行へ行っていたのだと説明した。オオス=ナルガイの谷に築かれた荘厳なセレファイスの都、おぞましい地底世界のナスの谷、多くの人が行きかい交易で栄えるダイラス=リーン、そして忘れられた地カダスなどの話をしてくれた。結局、オオタがなぜ俺に荷物を預けたのかはわからなかったが、アイツが良ければそれでいい。また日常に戻るとしよう(了)

3、気づくと俺は街を彷徨っていた。足がガクガクとする。どうやら相当慌てていたらしい。

なぜか大事に金属の円筒形の容器を抱えていた。これは一体どうしたのだろう。どこからか盗んできてしまったのだろうか。アパートを出てからの記憶がない。捨てて置くわけにもいかず俺はアパートに持ち帰り冷蔵庫に保管した。きっとこれはオオタのものだろうと思うことにした。今日もオオタは来ない(了)

4、俺の中で何かが切れた音がした。気が付くと俺は我を失い目につくものを破壊しつくしていた。

あたりには残骸が散らばっている。その中には肉片のようなものや、気味の悪い粘液が混ざっていたが最早それがなんだったのかを知る術はない。呆然として帰路についた。そしてオオタは二度と姿を現すことがなかった。(了)

5、何かが呼んでいる気がする。俺はふらふらと足を進めた。俺を止めようとする手が伸びるが気にしない。俺は駆け出した。そこには樂園があった。気が付くと一面の花畑に俺はいた。

もう二度とあのアパートに帰ることはないだろう。オオタと会うことができないのが残念だが、この素晴らしい地を離れるつもりはない。俺は満足した。(了)

6、俺は気を失っていたようだ。気が付くと手も足も動かさなくなっていた。いや、それどころか自分の肉体が何一つ動かさないとすることに気づいた。思考することをやめれば少しは楽になるのにと考えた、人は中々考えることをやめることができないのだ。俺は狂うことも死ぬこともできず、ただひたすらに自らの考えを巡らせ続けたがそれで何かが解決することはなかった。(了)

クレジット

執筆、ゲームデザイン 冒険者でいー(D_human)

本作は、「株式会社アークライト」及び「株式会社KADOKAWA」が権利を有する『クトゥルフ神話TRPG』シリーズの二次創作物です。

Call of Cthulhu is copyright ©1981, 2015, 2019 by Chaosium Inc. ;all rights reserved. Arranged by Arclight Inc.

Call of Cthulhu is a registered trademark of Chaosium Inc.

PUBLISHED BY KADOKAWA CORPORATION 「クトゥルフ神話TRPG」「新クトゥルフ神話TRPG」